都市計画論文集　No. 38-3　2003年10月
社団法人　日本都市計画学会

124. 篠島における住居表層と街路空間の特性およびその変容に関する研究

A Study on the Spatial Characteristics of Facades of Houses and Alley in the Shino Isle and their Transition

後藤吉彦*・木下　光**・丸茂弘幸**
Yoshihiko Goto, Hikaru Kinoshita, Hiroyuki Marumo

This paper aims to clarify the spatial characteristics of a fishing village in the Shino isle, and to investigate how they were formed and have changed. We also discuss the factors which maintain the spatial identity of the village in the Shino isle in spite of the overwhelming tides to homogenize local characters everywhere.

The spatial characters of the village appear in two phases in the Shino isle; the unique facades of houses and the formation of 'SEKO' (extremely narrow and winding alleys). As for the facades of houses, 'KAKOI' (wrapping), 'DEMADO' (bay window), and colorful wall paintings are identified as elements which make their facades so special.

Keywords : Shino-isle　fishing village　high-density dwellings　facades of houses　alley
篠島　漁村集落　高密度居住　住居表層　路地

1．序論

1-1 研究の背景と目的

離島は四方を海に囲まれいわば閉ざされた空間であり独自の文化・習慣を育み、その特異な環境や厳しい自然条件は特徴的な集落形態とそれらを構成する住居形態を生み出してきた。

近代化にともなう技術の進歩、交通・通信網の発達は大都市を中心とする画一化の波を生み出し、多くの地方都市はその個性を失いつつあるが、個性の消失をよしとせず様々な施策や運動によってその個性を保持し後世に伝えようという試みが各地で行われている。

これら画一化の趨勢とこれへの抵抗という相反する二つの波のせめぎあう中にあって、離島集落には行政指導や住民運動等の意図的な行為によらずに、きわめて自然な形でその個性を保持しているものが見出せる。

本研究においては、愛知県名古屋市の都市圏内に位置し波の末端に位置しながらも独自の集落形態を保ち続けている離島の一つである「篠島」を調査対象とし、集落の個性を造り出しているものはいったい何であるのか、またそれらはどのように成立して変容を遂げたのかを明らかにし、篠島が現在でもその個性的な集落を維持している要因とその持続可能性についての考察を進めるものとする。

1-2　調査対象集落の概要

篠島は知多半島先端部と渥美半島を結ぶ線上、知多半島先端の師崎港から海上約4kmに位置し周囲約6kmの小さな島である。人口は約2千人、漁業従事者は約4割におよび、その他業種従事者も何らかの形で漁業に携わることが多い典型的な漁村集落である。縄文時代から集落が存在していたことが確認されているが、本格的な集落形成が始まったのは、観光客の流入が増加した江戸後期に入ってからのことである。[1)2)]

平地が少なく、【ナカニシ】[(1)]と呼ばれる北西風の影響から島中央の尾根から東側に偏って集落が拡大していった。集落拡大が進む中で宅地は飽和状態に達し、極めて高密度な集落が形成されていった。(図1)　昭和51年に行われた埋め立て造成事業によって島の北側は大きく形を変えたが、旧来からの集落は今なお個性的な空間を保ち続けている。

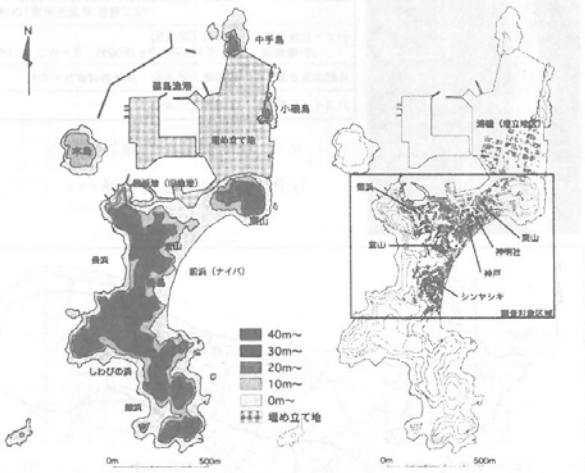

図1　篠島地形図および住宅分布図

1-3　既往研究と研究方法

篠島に関する研究は、考古学・社会学の分野においては数多くされているが、建築学の分野においてはほとんど行われてはいない。篠島やその近隣諸島に関する研究

*正会員　(株) 国際デザインセンター (International Design Center NAGOYA)
**正会員　関西大学工学部建築学科 (Kansai University)

では、畑聰一氏が一連の研究[3)4)5)]の中で篠島を取り上げ、間取りを中心とした室内空間についての分析を行い、居室の構成とその利用を明らかにしている。しかし、屋外空間や建築様式、集落形態等についてはほとんど触れられてはいない。また、畑氏が同研究を行ってから20年の歳月を経ており、その間篠島をめぐる環境や社会環境は大きく変化している。

本研究では、実地調査とヒアリング調査[(2)]をもとに上記の資料を参考にしながら、(1)篠島集落の建築学的特性の抽出(2)特性の成立要因の解明と特性のもつ意味や機能の理解(3)特性の変容の順に分析と考察を行う。

2. 現況調査による篠島集落の特性

2-1 調査対象区域

調査対象区域は旧態を残す神明社を中心とする神戸・照浜・東山・堂山からなる中央集落および【シンヤシキ】と呼ばれる地区とし、調査に際して成立年代の浅い埋め立て地区(浦磯)は対象外とした。(図1)

2-2 篠島集落の特性

実地調査[(2)]によって得られた篠島集落の特性は、住居表層(写真1・表1)と街路に表れている。

(1)住居表層の特性

住居表層の特性は①【カコイ】…下見板張りに代表される壁面全てに施された板張り。②【デマド】…街路上に大きく突出した開口と壁面。③外壁塗装…家屋に施された、明度・彩度の高い色彩豊かな外壁塗装,の3点。

実地調査日	平成14年7月24日~31日 (調査員5名)
調査家屋総数	809件 (住居627件、店舗35件、民宿12件、加工場等 非居住家屋100件)
デマド設置件数/設置個数	245件 (30.3%) 1ヶ所119件、2ヶ所92件、3ヶ所以上34件
外壁塗装家屋	539件 (66.6%) ※新建材家屋を含む
カコイ (板張り)	319件 (39.4%)

表1 住居表層特性該当件数

写真1 篠島の住居表層

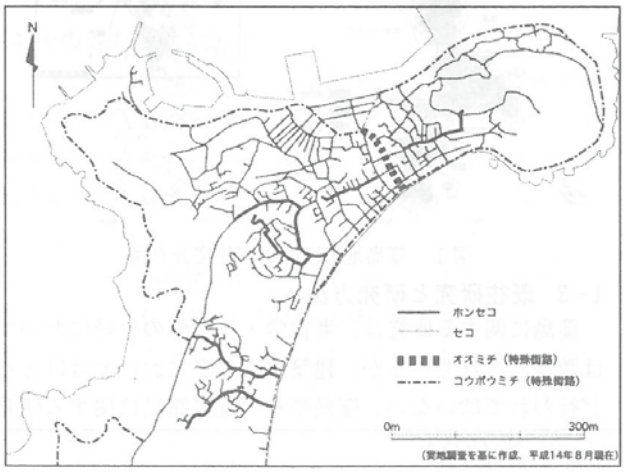

図2 篠島街路図(※ホンセコについては文末注釈(8)を参照)

(2) 街路の特性

篠島の街路は一般的な生活道である【セコ】と神聖視される【オオミチ】[(3)]等の特別な意味と呼称を持つ特殊街路からなり、明確なヒエラルキーが存在している。図2に示すように、街路の大部分を閉めるセコは道に対する一般的な呼称としても用いられ、街路の特性もセコに表れている。

①セコの複雑性…細く入り組んだ迷路のような街路網と、斜路と【サカダン】[(4)]を利用した起伏の激しい街路。

②セコの多機能性…通行路に留まらない多様な利用形態。

3.住居表層の特性とその成立

住居表層特性の成立要因とその構造について島の技術者へのヒアリング調査[(2)]により明らかにした。

3-1 カコイの成立

カコイの成立には篠島の気候・風土がその要因となっている。海に囲まれ、家屋が年中潮風にさらされることから木造家屋の柱や梁などの構造部材は腐食し、雨は土壁を崩すため家屋は内陸部に比べ非常に痛みやすい。そこで成立したのが、家屋を自然条件から保護するために壁面全てを板張りで囲んでしまうカコイの技法である。

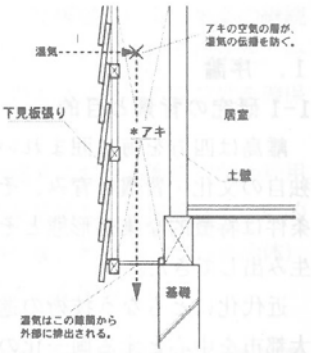

図3 カコイの二重壁

カコイ成立にはセコが生み出すセコ風[(5)]もその一要因となっている。カコイを施す際にはカコイ材と内壁の間に【アキ】と呼ばれる隙間を持たせ、二重壁の構造をとることによって湿気の伝播を防いでいる。(図3)

3-2 デマドの成立

家屋保護のためにカコイが用いられる中で、開口部にはカコイを設けることができないことから、特別な雨仕舞いを必要とした。そこで成立したのがデマドである。デマドは、まず開口部を持つ壁面のカコイのアキを通常より拡げることにより開口部をセットバックさせ、少しでも雨の降り込みを防ぐ。さらに木造建具では篠島特有の強風によって吹き込む雨を防ぎきれないことから多重窓の構造をとっている。(次頁図4)

建具はアキを挟んで内側と外側の両方に設けられ、外窓の外側には雨戸が、さらに外側には台風時などのためのはめ込み式の板があり、デマドにはあわせて四重の備えが施されている。デマド側面には開き戸が付けられ、アキが収納空間として日頃使わない内窓やはめ板が納められている。また、雨戸や外窓もアキ内部に納めること

ができるようになっている。

さらにデマド底部と軒の間には 5 mmほどの隙間が設けられ、アキ収納内に納められた建具についた雨水や湿気、多重窓では防ぎきれなかった水分を排出することができるようになっている。

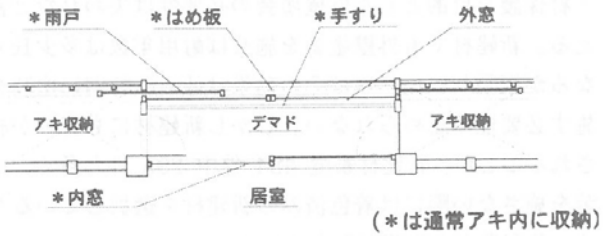

図4　デマド多重窓図解

3-3 外壁塗装の成立

家屋を保護するカコイ材には一般的に杉板を用いていたため、カコイ材も潮風や雨水による腐食を免れることができなかった。しかし板張りを全て張り替えることは、大変な費用と手間を要するため、その代わりとして取り入れられたのがカコイ材を保護するために、塗装を施すことであった。外壁塗装には当初コールタールが用いられていたため現在のような色彩は表れてはいなかった。

戦後、防腐・防水加工に優れたペンキが普及し、コールタールに代わってペンキが用いられるようになり、潮風の影響からモルタル造や RC 造、鉄骨造が普及せず土壁の木造にカコイを施す様式が主流であり続けた事と相まって、ペンキの色の増加に伴い色彩も豊かになっていった。

3-4 住居表層特性の関係性

住居表層の3つの特性は、独立したものではなく、過酷な自然条件、なかでも風雨を背景とし時には互いを成立要因としながらカコイを中心とした表 2 のような関係性を持っている。

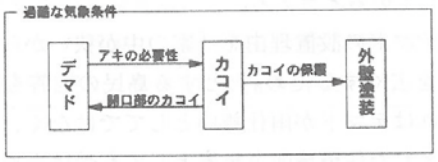

表2　住居表層特性の関係図

4．街路の特性とその成立

4-1「土地の供出」によるセコの成立

街路の特性は「土地の供出」という、独自の街路（セコ）構築システムによってもたらされている。セコは近隣住民が互いに土地を提供しあうことによって成立している。そのため厳密に言えばセコは模式図5のように私有地の集合体であり、敷地境界がセコ上に存在することになる。セコ上に時折見られるマーキング（写真 2）[6]はこの境界線を示すものである。ただし、セコが私有地の集合体として捉えられることはほとんどなく、共有の土地とし扱われているのが実情である。漁村集落であるために【ネヤド(寝宿)】[7]と呼ばれる独自の文化が示すように、共有意識や仲間意識が極めて強い。逆に陸地は生産の場ではない事もあり、土地に対する私有意識は弱いと思われ、ゆえにこの様な土地の共有が認められたと考えられる。また、集落の高密度化が進み慢性的な土地不足という問題を抱える中では、街路用地を得るための手段としてとても有効なものであり、集落が発展する上で必要なものであったと考えられる。

4-2 セコの複雑性の成立

セコの複雑性は、その街路プランの立て方と「土地の供出」によってもたらされている。都市部において通常街路がまず計画され、街路によって区割りされた敷地内に住居プランが立てられるのに対し、篠島では建築プランが立てられると同時に街路プランが立てられる。

その形成過程は、【ホンセコ】[8]を中心とする住居群が拡大をみせる中で、ホンセコが延長されつつ既存の住戸群の隙間に人の往来が生まれてセコとして枝分かれを開始し、その先に家屋が建設される。セコが行き止まると建築プランにあわせて土地の供出が随時行われてセコはさらに枝分かれし、急な斜面の場合にサカダン[4]を活用した。（図6）

この行程の中で、建物の新築・解体、増改築にあわせてセコは生滅を重ね、現在の迷路のような細く入り組んだ複雑な街路網が形成されたと考えられる。

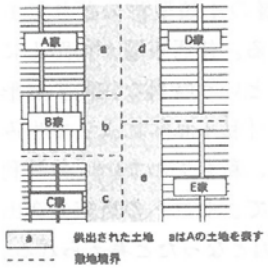

図5「土地の供出」模式図

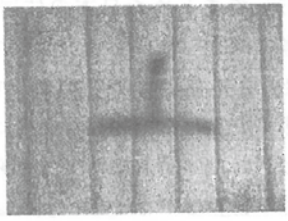

写真2 敷地境界のマーキング

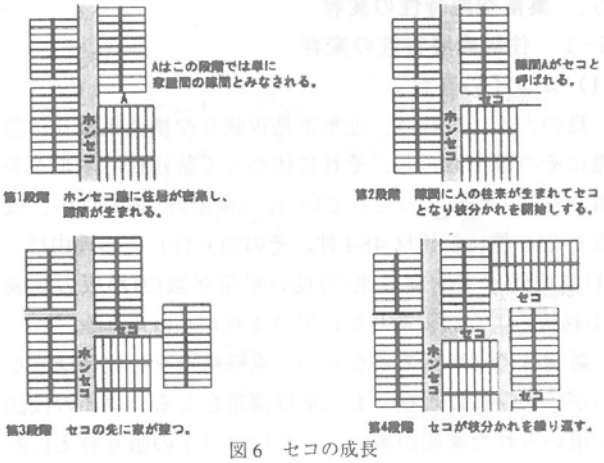

図6　セコの成長

4-3 セコの多機能性の成立

狭いセコ上には洗濯物や家財道具、時には浴槽がおかれるなど様々な私物が溢れ、狭い家屋内を補う生活空間として使われている。また、時には海産物の加工場となるなど、仕事場としての利用もなされている。

「土地の供出」によって得られたセコは、島民にとって通行路としてのみ機能する公的空間でない。また、いかに私有地であろうとも所有者のみが利用可能な私的空間でもない。セコは全ての島民にその使用が許された「共同利用の場」として扱われている。

セコはあくまで多目的利用が可能な「共同利用の場」として元々多機能なものであり、街路としての使い方はその一利用形態でしかないと言える。セコが共同利用の場として扱われている背景には、漁村集落特有の共有制に加え、【ジゲノバ（ジゲンノバ）】[9]と呼ばれる公有地において共同利用が昔から実践され、土地の共同利用や土地を分かち合う文化が定着していたことも大きいと考えられる。

4-4 セコと住居表層

「土地の供出」はセコの特性を生み出すと同時に住居表層の特性の成立要因ともなっている。篠島の住居表層（デマド・カコイ）はセコに突出している。（図7）

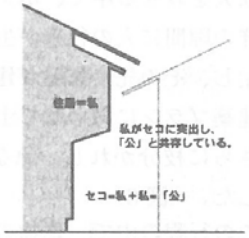

図7　篠島の住居表層

これは、たとえば大野秀敏氏が「見えがくれする都市」でまとめた日本の住居表層の4類型[10]のどれにも当てはまらない特殊な関係である。住居表層が街路上に突出し、私と「公」が共存するという特異な住居表層形態が成立した要因には、セコが「私＋私」によって生み出された「公」でありながらも、私も失わない「共同利用の場」というその性質によって、セコへの自家の突出に対して寛容であることが一要因となったと考えられる。

5．集落空間特性の変容

5-1　住居表層特性の変容

(1) カコイの変容

島の大工によれば、近年下見板張りや横見板張りは急激にその数を減らし、それに代わって新建材パネルが多用されるようになってきている。（家屋数 809 件中、板張り 319 件、新建材 484 件、その他 6 件）その理由は、(1)高い防水・防腐効果(2)長い耐用年数(3)杉板の高騰(4)杉板のように変形しない事の4点が挙げられる。

新建材の使用はアキをもつ二重壁構造を必要とはしないが、実際には現在でも二重壁構造をとるカコイの技法が用いられた家屋が多い。これはカコイの張り替えに際に、もとの構造を利用して新建材が用いられていることに加え、島の建築は全て島の大工の手によって行われる事による技術の伝承もその大きな要因となっている。

(2)外壁塗装の変容

防水・防腐効果に優れた新建材の普及によって、カコイ材保護を目的とした外壁塗装の必要性は失われたと言える。新建材でも外壁塗装を施せば耐用年数は多少長くなるが板張りに比べればその効果は低く、特別に塗装を施す必要性は認められない。しかし新建材にも塗装が施されることが、新建材家屋 484 件中 295 件と多く、塗装を施さない際には着色済みの新建材を選択しているため、色彩豊かな集落が形成されている。

島民は外壁塗装を施す際、「定期的に色を塗り替え、そのつど色目を考えるのが楽しみ。」と語る人がいるように、単にカコイを保護するためだけではなく、鮮やかな色によって家屋を飾る事を楽しみながら行っているようである。新建材が多く用いられるようになった今日では、家屋の装飾としての意味合いがより強くなったと思われ、これを目的として外壁塗装は行われていると考えられる。

(3)デマドの変容

デマドの本来の目的は雨仕舞いであり、多重窓はその機能を示すと同時にデマドの特徴となっていた。しかし現在ではサッシュの普及によって多重窓の必要性が失われ、デマドから内窓が取り除かれることとなった。また計画段階から内窓を取り除かれたものが新設されている。このような多重窓を持たないデマドの登場は、デマドに求められる機能の変化を示していると言える。

写真3　デマド内部

また、デマドの設置理由を「家の中が狭いから、少しでも座敷を広くするため。」とする島民の回答も得られたが、これはデマドが雨仕舞いとしてではなく、内部利用を目的とした住環境向上装置としても受け止められていることを示していると考えられる。

さらには、デマドは街路に突出して人目につくことに加え、島の表現である「デマド一つで、座敷（居室）が一つ減る。」と言われるほどの費用を要したため、いつしか一種のステータスシンボルとして受け止められるようになったようである。これらの理由から、かつては雨仕舞いのために大工が必要に応じて設けていたデマドも、現在では住民が望んで設けている。

5-2　街路特性の変容

集落の高密度化を成立要因とした「土地の供出」は、

埋立て造成が行われるまで続いた集落の高密度のために、その必要性が失われず持続していたと考えられる。

しかし現在では集落内の家屋は埋立てによる宅地開発に加え、人口の減少を理由に減少傾向にあり、集落内には廃屋や非居住家屋が増加している。また、家屋の取り壊し後を利用した現代版ジゲノバ[9]も増加している。(図 8) これは集落の密度低下を意味しており、土地不足を解消するための手段としての「土地の供出」の必要性は失われつつあることを示している。

この様な状況下においては、セコが「土地の供出」の「私＋私」によって得た「公」としての性質が失われていくと考えられる。このことは、同様にセコの特性の存続基盤の消失を意味していると言える。

しかし、「共同利用の場」としての性質、つまりセコを介して私が「公」の中で共存しているという本質には変化が生じていないのではないかと思われる。

このような考察を行うにあたって「埋め立て地よりこっち（高密度集落内）の方がずっと広いし、友達も多いから」と語る老婦人の一意見を参考にするならば、セコに対する島民の価値観が、セコの本質を持続させる一要因となったのではないかと考えられる。

これは一見広く見える埋め立て地区は、塀や側溝により明示された敷地境界の存在によって、生活が個々の敷地内にとどまりがちで、その生活領域はかえって狭く意識される。逆に、集落内は個々の領域は狭くとも、セコやジゲノバによってもたらされた共同領域の存在によって、実際の生活領域がより広く意識されている事を意味していると言える。この事を考慮に入れた場合、集落の密度低下は、個々の専有領域の拡大をもたらすものではなく、共同領域の拡大をもたらすものとして島民に捉えられていると考えることが自然であろう。

漁村集落の共有意識によってもたらされた「土地の供出」とセコの性質は、高密度化が進む中で集落の発展を支えながら、セコを共有領域とした共有制・共有意識をより強固なものとしてその価値を高めてゆく。集落の密度低下によって、以前のような「土地の供出」の必要性は失われながらも、共有領域としてのセコの重要性は失われてはいない。そのため「土地の供出」が行われることがなくとも、共有領域としてのセコは今なお残り、その結果、現在に至るまでセコの特性が受け継がれていると考えられる。

セコは土地と土地を結ぶだけではなく、島民の生活には欠かせない共有領域であり、島民の人間関係をもつなげている。このような道であるからこそ本来は地縁・血縁関係、社会上の人と人との結びつきを表す「世故（せこ）」という呼び名が道に対して用いられているのではないかと考えられる。

5-3　特性の独立・分化

特性が変容してゆく中で、特性間にみられた関係性も変化している。住居表層の特性についてはその成立要因がすべて気候への対応にあり、その目的が雨仕舞いであることから、互いに深い関係性を持っている事はすでに述べた。この関係性を考えた場合、かつては３つの特性が個別に存在することはあり得ないはずである。

しかし図 9 が示すように現在では３つの特性全てが揃った家屋ばかりではなく、1、2 つの特性を持った家屋が多く存在する。これは住居表層特性間の関係性が希薄なっていることを示すと同時に、現在の住居表層特性が過酷な自然状況への対応としてだけではなくそれぞれの新しい機能や価値観によってもたらされることを反映していると言える。

同様にセコと住居表層との関係にも変化を生じている。住居表層の突出を可能とした要因がセコの「土地の供出」によって得られた性質にあることはすでに述べた。しかし現実には「土地の供出」が行われていないオオミチに対してもデマドが設けられている。

これはセコやジゲノバだけではなく集落全てを共有領域として捉えている表れであると言える。特性の独立・

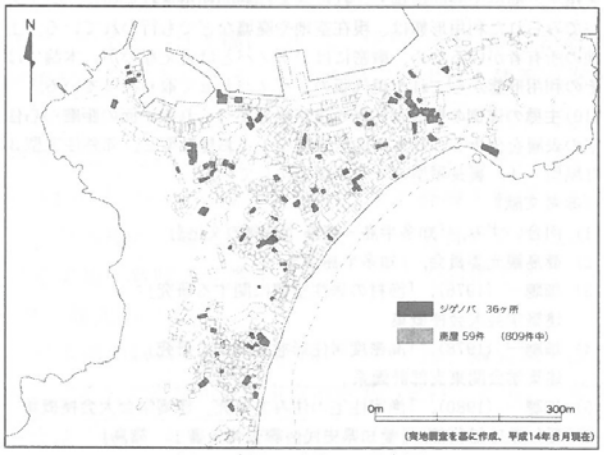

図8　廃屋・ジゲノバ分布図

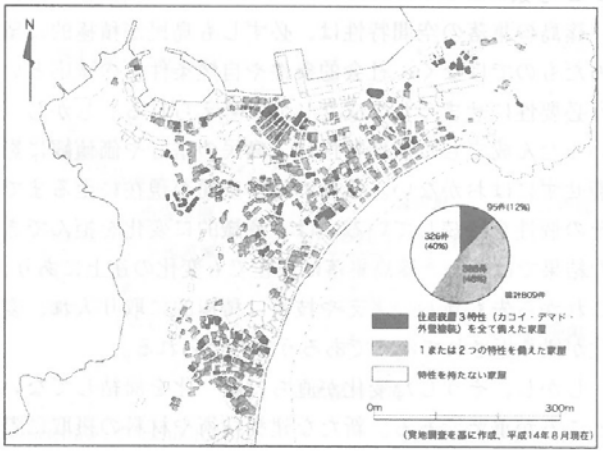

図9　住居表層特性の独立

分化にみられる関係性の変化は、現在の特性がその成立要因によって受け継がれているのではなく、それぞれが変容してゆく中でもたらされた新たな価値観によって受け継がれていることを示していると考える。

6．まとめと考察

6-1 まとめ

これまで述べてきたことをまとめると、

(1) 篠島の個性的な集落空間の特性は、住居表層と街路に見いだすことができる。

(2) 住居表層を特徴付ける三つの要素①カコイ②デマド③外壁塗装は全て、篠島の気候条件、特に潮風と雨からの家屋保護を目的とした雨仕舞いとして成立し、カコイを中心として相互に密接に関係していた。

(3) 漁村集落特有の高い共有意識は土地を分かち合う「土地の供出」を生みだし、街路特性である①複雑性と、共有領域として②多機能性を成立させている。

(4) 共有領域としてのセコの性質は、住居表層の一部が街路上に突出することを許容し、変化に富む特異な空間形態が成立する一要因となっている。

(5) 建築技術の発展は、住居表層特性の成立要因となった雨仕舞いとしての必要性を消失させている。

(6) 住居表層特性は、外壁塗装が家屋の装飾手段として、デマドは内部空間の利用やステータスシンボルとしてそれぞれ新たな目的や機能によって持続している。

(7) 集落の高密度化は街路特性を生み出す「土地の供出」を持続させる一要因となったと考えられる。

(8) 集落の密度低下によって「土地の供出」を行う必要性は薄れながらも、共有領域としてのセコの利便性に対する住民の認識は高く、これにより街路特性が持続されている。

(9) 特性が (6)(8)を持続要因とする中で、成立時に見られた関係性は薄れ、特性の独立・分化が進んでいる。

6-2 考察

篠島の集落の空間特性は、必ずしも島民が積極的に望んだものではなく、社会的条件や自然条件への適応という必要性にせまられて成立したと考えられる。しかし、いったん成立した空間特性は、島民の嗜好や価値観に影響せずにはおかない。篠島の集落空間が現在に至るまでその個性を持続しているのは、意識的に変化を拒んできた結果ではない。篠島集落は現在でも変化の途上にあり、これから先も新しい考えや技術は積極的に取り入れ、変化が繰り返されてゆくであろうと考えられる。

しかし、そうした変化が直ちに画一化を帰結してないところが重要である。新たな建築技術や材料の摂取に際しても、そこに独特の嗜好や価値観が付加され、島の新たな特性として付け加えられてゆく。その流れの中で、本論で明らかになったように住居表層や街路の特性の一部は、その機能や意義を変化させながらも村民の嗜好や価値観を具現化するものとして受け継がれ、篠島の集落空間はその個性を保ち続けると考える。

変化の波から逃れることはできない現代社会において、いくら波に抗おうともいつしか呑み込まれてしまう。逆にその波を受けながらも、そこで得られた新たな文化を自らの文化に取り入れる事により個性の一部は受け継がれる。この様な事例が篠島であり、この柔軟な対応にこそ、個性を保ち続ける最大の要因があるのではないかと考える。

《謝辞》
本研究を行うにあたって、大工の天野祥直様をはじめ島民の皆様には多大なるご協力を頂きました。ここに感謝の意を記します。

《注釈》

(1)【　】表記は島の呼称を表し以下全てカタカナ表記で行う。

(2) 実地調査は、H14. 7. 24～7. 31 にかけて調査員５名で行った。家屋 809 件の「デマド」「外壁塗装」「カコイ」の有無と分布調査、および、地図表記が行われていない街路の抽出を行った。その際、面接・口頭形式により、地域住民に対して３特性への認識について随時ヒアリング調査を行い、特性の成立要因とその構造については島の技術者（大工３名、電気工１名、配管工１名）にヒアリング調査を行った。ただし、地域住民に対するヒアリングは統計的なものとしてではなく、考察・推察する際の参考意見として取り扱っている。

(3) 神明社前を走る別名「カミサマミチ」。かつて神明社の境内であり、現在でも神事に用いられるなど神聖視されている。特殊街路としてその他にも島の周遊街路である「コウボウミチ」等がこれにあたる。

(4)坂段。急斜面に用いられる階段。セコと区別して表現されている。

(5)幅員が狭いセコに入った風が、一気に加圧されて発生する突風。雨水を住居壁面にうちつけ、家屋の痛みをまねく。

(6) 敷地境界を表すマーキングは通常は行われず全てに施されてはいないが、土地問題等のトラブルが生じた際などに示される。模式図はこのマーキングをもとに製作した。

(7) 中学卒業と同時に結成される共同体。一人の親を【ヤドオヤ】としてその家を共同宿舎としていた。同じヤドの仲間を【ホーバイ（朋輩）】と呼び、仲間意識が極めて強いその関係は一生涯続く。

(8)根幹となる比較的幅の広いセコ。

(9)「地下の場」。地下は一般庶民や土着の人、または家格の低い宮人を指す。前浜や共同田畑もこれに含まれ共同利用されていた。ジゲノバでみられた利用形態は、現在空地や廃墟などでも行われている。土地の所有者がいるため、厳密にはジゲノバとは言えないが、本論ではその利用形態からこれを現代版のジゲノバとして取り扱っている。

(10)主屋の道側の壁面と住居の道路境界がつくり出す面の距離から住宅の表層を分析し、日本の住居表層を１．お屋敷型２．郊外住宅型３．町屋型　４．裏長屋型の４つに類型化している。

《参考文献》

1) 河合いずみ，「知多半島・篠島『篠島の文化』」
2) 篠島観光委員会，「知多半島篠島」
3) 畑聰一（1976），「漁村の居住空間に関する研究」建築学会大会梗概集
4) 畑聰一（1978），「高密度居住形態に関する研究」建築学会関東支部計画系
5) 畑聰一（1980），「漁家住宅の住み方研究」建築学会大会梗概集
6) 愛知県庁総務部，「愛知県史民俗調査報告書１　篠島」
7) 槇文彦（1980），「見えがくれする都市」、鹿島出版社